１４５「会員紹介」

会員紹介は、私の所属する大学校友会「市原稲門会」の会報において、２０１７年初秋号（会報４７号・１０月２２日発行）から始まった企画である。同会報は年４回発行、Ａ４版通常１６ページで「イベント案内」「イベント報告」「会員投稿」「会員紹介」などの記事を中心に構成されている。

会員紹介は、「新規会員勧誘委員会だより」という企画で始まり、市原市を５地域に分け各地域ごとに１名ずつ、出身や経歴等のプロフィールと写真を掲載、最終的に全会員を誌上で紹介する計画である。

総会や新年会で顔を合わせたとき、顔も名前も分からないのでは話すきっかけがないことから、どんな会員がいるかを知ることが先決と考えたためである。

１回に５名、年４回発行で２０名、従って会員１００名全員を紹介するには５年かかることになる。記事は各地域で執筆担当を決め、その担当者が紹介者と面談してまとめていく。

出生年月、出生地、小中高校、学部、卒業年度、卒業後の経歴、結婚、家族、定年後、趣味・特技、市原との縁など、必要に応じてヒアリングし、Ａ４半ページ程度の記事にまとめる。

この企画は順調に滑り出したかに思われたが、第１回５名、第２回４名、第３回３名、第４回１名、第５回２名と徐々に紹介者が少なくなり、６回以降１名ずつになってしまった。

面談して記事にまとめることがそう容易ではないこと、気軽に面談に応じてくれる人が少なくなったこと、会員の中には敬遠する人がいることなどの理由が考えられる。

また、面談で出た貴重な体験などを紹介するのに、半ページ程度の記事では“うわべ”しか書くことができず、読み応えのある記事にすることが難しい。

私は第５回目に１名担当し、第８回（会報５１号）から現在まで毎号１名ずつ１５名の紹介記事を書いた。２０２２年から会報は年３回発行となり、現在６９号である。

これまでの紹介者は３１名、ほぼ半分は私が担当したことになり、専任の担当になった感がある。

現時点（２０２３年１２月）で、開始から６年経過しているが１００名には遠く及ばず、当初の狙いどおりではない。しかし、このことは会の実態や会員の希望を反映した結果であり、会員１人に対し２ページを割り当て、その人の歩んだ人生を深く掘り下げた“記録”いわばミニ個人史として、読み応えのある内容が受け入れられたものと思う。

自分の人生を自ら書くことはなかなかできないもので、自から語れば自慢話になりやすい。

しかし、他人の書いた記事を子や孫に読ませることによって、自分の生きてきた道を自然体で知らせることができる。

これまで紹介させていただいた方々の例を以下に紹介する。

① 「子供が大好きで、教員は自分にとっての天職」という教育一筋の人。

できの悪い子にやる気を出させる指導を行い、その子供たちが立派に成長、教え子からたくさんの手紙をもらうという、先生とはやりがいのある仕事だなぁーと思う。

Ｃ小学校校長を最後に現役引退、７５０人いる生徒の５００人もの名前を覚えていたことや、卒業生一人一人に、校長として直筆（筆文字）の“言葉”を贈るなど、生徒への愛情とその熱意に感心させられた。

② 異動に翻弄されたサラリーマン

機械工学科を卒業、鉄鋼マンとしてスタート。１３年在籍した製鉄所から突然の人事で全く専門外の半導体研究センターへ、技術者としての“文化の違い”を感じながらも１４年間勤務。また突然の異動で皮革素材製造会社（高級車の座席シート）への出向で山形工場へ。２年後、同工場の工場長（役員）で親会社を退社。リーマンショックによる注文の激減で、従業員の解雇など経営者として苦労を重ねた。異動はさらに続き、長野県千曲市にある電気計測器メーカーへ。多くの異動を経て、得難い経験ができて良かったというプラス指向の人。柔軟な考え方がなければ務まらなかっただろう。

③ 独力で人生を切り開いた苦学の人

幼い頃父を亡くし、中学卒業後鹿児島の親元を離れ、母親の兄を頼って上京、同居しながら働き始めるが、１７歳の若さで自活。アルバイトを掛け持ちしながら必死に生活した。“中卒ではダメだ”との強い思いから、夜間高校「早稲田大学工業高校」電気科に入学。最優秀の成績で卒業を迎え、早稲田大学への進学を推薦されたが、生活費や授業料を得るためには働くことが不可欠であり、進学は難しいと諦めていた。ところが会社の配慮により、特例で請負業務として仕事を発注してくれたことで、思ってもいなかった大学進学が実現した。卒業後は石油化学会社に就職、製造部門に所属しプラント制御主体に従事して定年退職した。厳しい境遇にめげることなく、前向きに生きてきたことが、努力と相まって運を味方に付け、充実した人生に繋がったといえる。

④ 貧困にめげず自らの不思議な才能と、なぜか可愛がられる性格で切り開かれた人生

広島市に生まれ５歳で被爆。無数の焼死者の中、軒下で生き埋め状態になったことで奇跡的に被害を免れたが、一瞬にして全ての財産を失い生活が激変した。焼野原のバラック青空教室に通う頃から並外れた記憶力で周りの人を驚かせていた。定時制高校進学と同時に働き始め、卒業後東京の弱小出版社に就職、会社内の簡易宿泊室に住まいながら働き始めた。仕事に慣れ、試しに受けた早稲田大学第二政経学部に合格。会社を午後３時に切り上げ、午後４時から１０時までの授業を受けた。

授業料は何故か社長が援助してくれた。新聞記者志望だったが、卒業の年に社長が急死、恩義があるため会社を辞めることができず、そのまま働き続けた。会社の業績は順調に伸び、社の中心人物の一人として結局定年まで働き、退職後はさまざまな社会貢献をして現在に至る。

人生の前半は貧しく非常に厳しい暮らしだったが、貧困にめげずひたむきに生きてきた。自らの不思議な才能と見えない力、強い精神力に支えられ、最善を尽くしてきたことが“運”を呼び込み、人生後半は穏やかな暮らしを得ることができた。

⑤ 大学時代の驚くべき経験の持ち主

大学入学と共に、モータリゼーションに憧れ自動車部に入部。学業より自動車部の活動に全力を注いだ。在籍中、自動車部に「アフリカ縦断登山隊」の話が舞い込んだ。運転手２名、隊員として協力して欲しいという申し出である。サハラ砂漠縦断は大冒険、運が悪ければ生きて日本に戻れない可能性もあるとためらう部員が多い中、いち早く車両隊員としてアフリカ行きを決断した。

自然の脅威，政情不安定な中、サハラ縦断とアフリカの山々への挑戦が始まった。国産車初のサハ

ラ縦断は成功するのか？全行程１９０００ｋｍ、その多くは砂漠地帯、特に南部タマンラセットからは苦難の連続で、方向を見失ったり、砂に車輪を奪われたのは数え切れない。それでも致命的なトラブルを免れ半年後無事ケニアに到達、サハラ縦断成功！この記録は朝日新聞で連載、朝日テレビでも放送された。身近にこんな凄い体験をした人がいたことは本当に驚きである。

⑥ 資産家の家に生まれて

市内有数の資産家の次男として生まれた。兄は東大医学部を卒業、家業を継ぐことなく医師として自立、９０歳を過ぎた今も現役内科医として活躍している。

大手地元銀行に１０年ほど勤め、以後家業の不動産業を引き継いだ。これまでに地元有力者として、青年会議所理事長、市教育委員（長）、公的団体などの要職を務めてきた。

曰く“努力家で温厚、頭が上がりません”という兄、その兄は著書の中で次のように回想している。“当時は全く自覚していなかったのですが、弟を生んでくれたので私は家業を継がずに済み、父がやらせてみたいと思っていたらしい医者になることができました”“弟が生まれたおかげで私は医者になれ、「ここには帰って来るな」といわれて今日がありますので、弟には大変感謝しています”

それぞれが、かけがえのない存在としてお互いを認め合うことができる関係が素晴らしい。

住まいは羨ましい限りの豪邸、しかし台風で敷地内の巨木が倒れ掛かったり、地震で石灯籠が傾いたり、家屋敷は職人の高齢化と人手不足で“荒廃”している、と我々には思いもよらない悩みもある。

「人の歩み」を書いていると、波乱万丈とはいかないまでも、山あり谷あり、それぞれ様々な経験を積み重ね、人生の厚みが感じられる。振り返り、自分はどうだろうか？大学を卒業し一般企業に就職、いろいろ苦労はあったがそれほど酷くはない。比較的平穏で恵まれた人生であり、人に感動を与えられるほどのものはなく、そう思うと少し寂しい気もする。（２０２３．１２．１０）